

青年ラディボ・ソランケ

——その生い立ちから西アフリカ学生同盟の創設に至るまでの軌跡——⁽¹⁾

落 合 雄 彦

- 一、はじめに
- 二、青年ソランケの軌跡
 - (一) ヨルバランド時代
 - (二) フリータウン時代
 - (三) ロンドン留学時代
- 三、アフリカ人としての「自助」の精神
- 四、結びに代えて——西アフリカ学生同盟の創設——

一、はじめに

人間の一生をいま仮に四季に譬えるならば、おそらく幼少期から青年期までは春、壮年期は夏、熟年期は秋、そして老年期は冬とでもいうべきであろう。もちろん、人にはそれぞれ千差万別の人生があり、こうした一般的な時期区分を必ずしもすべての人に適用しうるはずもない。が、人がその人なりの人生という一大事業を成し遂げ、その齡を全うして永久の眠りに就くまでの時間の流れは、やはり四季のような何らかの時期区分をその本質として可能ならしめるものなのではなからうか。

本稿の目的は、一九二五年、イギリスに留学する西アフリカ人学生を中心に創設され、以後三〇年以上にもわたり、アフリカの植民地ナショナリズムの高揚とパン・アフリカニズムの涵養に貢献した西アフリカ学生同盟 (West African Students' Union: WASU) の創始者ラディボ・ソランケ (Ladiipo Solanke) の〈人生の春〉を考察することにある。

WASU の歴史的な重要性を論証するには多言を要しない。WASU は、アフリカ・ナショナリズムが確かな胎動を始めていた両大戦間期にロンドンの地に創設され、ダンクアー (J. B. Danguah: ゴールドコースト、現ガーナ)、エンクルマ (Kwame Nkrumah: ゴールドコースト)、デイヴィス (H. O. Davies: ナイジェリア)、ケニヤッタ (Jomo Kenyatta: ケニア) といった数多くの卓越したナショナリストを生み出す温床となり、また、ケイスリー・ヘイフォード (J. E. Casely-Hayford: ゴールドコースト)、ガーウィー (Marcus Aurelius Garvey: ジャマイカ)、デュボイス (W. E. B. DuBois: アメリカ)、パドモア (George Padmore: 英領トリニダード)、アジキウェ (Nnamdi Azikiwe: ナイジェリア) ら当時を代表するパン・アフリカニストと接触し、アフリカ人とアフリカ系人の連帯と統一を志向するパン・アフリカニズムの思想的潮流を醸成するひとつの歴史的拠点ともなった。このよ

うに WASU は、一学生組織としての枠組みをはるかに越えて、アフリカのナショナリズム期における政治意識の形成と発展に重要な歴史的役割を果たしたのである。⁽²⁾

本稿においては、まず最初に、既存の二次資料に加えて、ソランケ自身の日記や筆者が直接インタビューを行った関係者からの証言等をもとに、ソランケの生い立ちからイギリス留学までの青年時代の軌跡を追ってみたい。そして、それに次いで、ソランケがのちに留学先のロンドンの地でアフリカ人のための学生組織の創設を決意するにいたった精神的支柱、特に彼が言うところの、アフリカ人としての「自助」の精神というものが、ソランケの青年時代を通じていかに形成されたのかを考察していく。

二、青年ソランケの軌跡

(一) ヨルバランド時代

西アフリカのナイジェリア南西部からベナン南部にかけての沿岸部一帯には、ヨルバ人という民族が広く居住している。そして、このヨルバ人が居住している地域のことを、通称ヨルバランドと呼ぶ。

ソランケは、一八八〇年代中葉、このヨルバランド南部の町アベオクタ (Abeokuta) の郊外にあるオフアダ (Ofada) という村に生まれた。⁽³⁾ しかし、ソランケの厳密な生年は必ずしも定かではない。これまでは、ソランケの生年を一八八四年とする通説がみられたが、筆者の調査によれば、ソランケが埋葬されているロンドンの墓地の台帳には、ソランケは一九五八年九月二日に逝去し、同六日に埋葬され、享年七十二歳であったと記録されている。⁽⁴⁾ もし、この墓地台帳の記録が正確であると仮定すれば、彼の生年はこれまでの通説よりもやや遅い一八八六年（あるいは八五年）であったことになる。⁽⁵⁾

ソランケは、ヨルバの伝統的占いであるイファ (Ifa) を司る家系の長男としてこの世に生を受けた。イファとは、シュロヤシの実を用いて行うヨルバ人の占いで、その卦 (け) の出方には二五六通りがあり、それぞれの卦にはヨルバの様々な諺や物語が結びつけられているという。そして、イファの占師は、病氣や争いごとといった問題を抱えて相談に訪れる人々に対して、こうした卦に結びついた諺や物語を織り交ぜながら忠告や助言をするのである。⁽⁶⁾

こうしたイファの占師の家系に生まれたソランケは、本来であれば、父や祖父と同様に伝統的占師となるべき定めにあつたはずであるが、彼の人生は、イファの不可思議な託宣によって大きく変えられていくのである。つまり、ソランケが生まれると、やがて彼の父に対しておよそ次のような主旨のイファの託宣が下されたという。⁽⁷⁾「この子をそばにおいて育ててはならない。誰かに預けよ。さもなければ、必ずや災いが降りかかることだろう」。

このイファのお告げを受けたソランケの父は、息子を引き取って養育してくれる里親を探したがみつからず、最後にはアベオクタの町にいた英国国教会の白人宣教師ペリー (Rev. Paley) のもとに息子を預けることとした。そしてこれ以後、ソランケは、オファダの両親のもとではなく、アベオクタのこの白人宣教師のもとで養育され、名前もラディボ・ペリー (ペリー師のところのラディボ) と呼ばれるようになった。⁽⁸⁾

ソランケの幼少期におけるこの奇妙な出来事のうち、イファの託宣の真偽については、当然のことながら検証のしようもない。しかし、それよりも興味深いのは、ヨルバの伝統的占師の息子であつたソランケがなぜキリスト教の白人宣教師のもとで養育されたのか、という点であろう。⁽⁹⁾ 無論、一世紀余りも前のヨルバランドで生じたこの私的な出来事を今日正確に説明することは、その経緯を記した一次資料等が新たに見い出されでもない限り、もはや不可能であり、またそれを説明する試みも学問的にみれば決して有意義な営みとはいえないであら

う。むしろ、本稿では、伝統的占師の息子がキリスト教の白人宣教師によって養育されるといったことが生じた、一九世紀のアベオクタという町の時代状況について短く考察しておきたい。

ソランケが生まれた一九世紀は、アベオクタばかりかヨルバランドの各地に住む人々にとって、まさに激動の世紀であった。

ヨルバランドには、一三—一四世紀にかけて、イフエ、イジェシヤ、イジェブ、エキティ、エグバ、オンドといった諸王国が形成されたが、その中から次第に勢力を拡大し、他の諸王国を勢力下に置くようになっていったのが、オヨ帝国である。優れた騎兵隊を中心とする強大な軍事力と奴隷貿易などの拠点を掌握してえられる経済力によって、オヨ帝国は一八世紀にその最盛期を迎え、南西部ではアシャンティ王国やダホメー王国と境界を接し、北東部ではニジェール川にまで至る広大な勢力圏を形成するにいたった。⁽¹⁰⁾

しかし、こうしたオヨ帝国の繁栄も長くは続かず、アラーフィン (Alaṣin) と呼ばれる歴代皇帝とその側近との内紛やヨルバ諸王国間の抗争などによって、オヨ帝国は早くも一八世紀末には衰退の兆しを見せはじめる。そして、一九世紀に入って、ジハード (聖戦) を唱えるフラニ人のイスラーム勢力が北部から侵入してくると、オヨ帝国は一挙に凋落への道程を歩み始めるようになる。

このオヨ帝国の衰退によって到来したのが、ヨルバ諸勢力間の激しい武力衝突の時代であった。一八世紀末から一九世紀中葉にかけて、ヨルバ諸勢力は、オヨ帝国の威信が失墜していくなかで激しい戦争を断続的に繰り返した。特に、当時ヨルバランドにおいて奴隷の需要が高まっていたことが、こうしたヨルバ諸勢力間の戦火に一層の油を注ぐ結果となった。⁽¹¹⁾

やがて、こうした戦禍から逃れる人々や戦争に敗走した勢力が、戦場となった内陸のヨルバランド北部から南部へと次第に移動を始めるようになる。そして、一八二九年あるいは三〇年頃、こうした北部から移動してきた

者のうち、ヨルバのサブ・グループであるエグバを中心に形成された町がアベオクタであった。⁽¹²⁾

しかし、形成初期のアベオクタには、もう一つ別方向からの人の流入がみられた。それが、解放奴隷の入植地フリータウンからのクレオール (Creole) の流入である。一七八七年に解放奴隷によって建設されたフリータウンには、北アメリカや西インド諸島の出身者ばかりか、奴隷船から解放された人々も多く入植するようになり、特に後者の解放奴隷たちは、自分たちの伝統文化を保持しながらも、フリータウンで西洋型の教育を受け、キリスト教に改宗するなど、西洋化の影響を強く受けるようになっていた。こうした解放奴隷とその子孫たちのことを、彼らが英語とアフリカ現地語の混合語であるクリオ (Krio) 語を話すことからクレオールと呼ぶ。そして、こうしたクレオールのなかには、奴隷として輸出され、その後解放されたヨルバ人とその子孫が多く含まれており、一八四二年までに、五〇〇人以上のこうしたヨルバの人々が故郷ヨルバランドへと帰還し、アベオクタに居住するようになっていたのである。⁽¹³⁾

さらに、ヨルバの戦争避難民とクレオールに加えて、ヨルバランドにおけるキリスト教の伝道拠点のアベオクタに置かれ、白人宣教師が到来したことが、アベオクタという町の形成と発展に大きな影響を与えることとなった。一八四六年、英国国教会系のなかでも福音主義的な傾向が強い英国聖公会宣教協会 (Church Missionary Society: CMS) の伝道所がアベオクタに開設されて以後、他の宣教団体も加わって、アベオクタには教会や学校が次々と建設されていった。また、白人貿易商による商店も開かれるなど、アベオクタは、沿岸部のバダグリやラゴスとともに、ヨルバランドのなかでも最も早くから西洋文明の洗礼を受け、またその受け皿としての役割を果たす町となるのである。因みに、一八五九年、『イウエ・イロヒン』(Iwe Irohin) というナイジェリア最古の新聞が、CMS 派遣の白人宣教師によってヨルバ語で発行されたのも、このアベオクタの地においてであった。⁽¹⁴⁾

このように、戦禍を逃れた避難民等によって一九世紀前半に建設され、そこに西洋的な生活様式を取り入れた

クレオールが流入し、さらに宣教師を中心とした白人の活動拠点が置かれるといった複層的な文化社会状況が、一九世紀のアベオクタにはみられたのである。そしてそこには、異なる文化社会集団間の摩擦や軋轢が常に内在しつつも、その一方でヨルバの古い伝統を維持しながら新しい西洋文明に接し、それを部分的に受容していく環境、条件、あるいは風土というものが醸成されていたのである。

ヨルバの伝統的占師の息子がキリスト教の白人宣教師のもとで養育されるという、ソランケの幼少時代に起きたやや奇妙な出来事も、こうした一九世紀という時代のアベオクタの社会状況を加味すれば、あながち理解しえないことでもないであろう。

その後ソランケは、アベオクタのアケ小学校 (Ake Primary School) 等で初等・中等教育を受けたのち、ヨルバランド北部のオヨにあるセント・アンドリュース・コレッジ (St. Andrew's College) という教員養成学校に学んでいる。彼のオヨ時代の学生生活に関しては、ほとんど何もわかってはいない。ただ、ソランケは、オヨ滞在中に白人宣教師の姓であるペリーから本来の父祖の姓であるソランケへと改名している⁽¹⁵⁾。

(二) フリータウン時代

第一次世界大戦の激しい砲火がヨーロッパ大陸の各地で鳴り響いていた一九一〇年代中葉、ソランケはシエラレオネのフリータウンに渡り、当時英領西アフリカにおける唯一の高等教育機関であったフラー・ベイ・コレッジ (Fourah Bay College) に入学した。

フラー・ベイ・コレッジは、一八二七年、CMSがアフリカ人の伝道者や教育者の養成を主眼として設立した教育機関であり、一八七六年にイギリスのダーラム大学の分校となっていた。フラー・ベイの入学選考基準は厳格であり、入学者は英領西アフリカのごく少数のエリートに限定されていた。例えば、一九一六年末の同コ

レッジの在学生総数は、第一次世界大戦の影響もあってわずか一九名ほどにすぎなかったのである。⁽¹⁶⁾ 在学生の多くは寄宿舎生活を送りながら、ラテン語、ギリシャ語、心理学、哲学、英文学、歴史学、倫理学といった諸科目を学んだ。そして、こうしたフラー・ベイを卒業したエリートのなかでも特に優れたハイ・エリートともいえるべきアメリカ人学生だけが、法学や医学といったより専門的な学位の取得のために宗主国イギリスへと留学することができたのである。後述するとおり、フラー・ベイを経てロンドン大学への留学を果たしたソランケは、そうした当時の英領西アフリカにおけるハイ・エリートの一人であったといえる。

ソランケが書き残した当時の日記を紐解くと、彼のフラー・ベイ・コレッジ時代の学生生活を垣間見ることができる。⁽¹⁷⁾ 例えば、一九一八年二月一日付の日記には次のように記されている。「速記とタイプライター打ちの初級クラス試験に合格した。しかも、そのクラスの最優秀候補生に選ばれた。『主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ』⁽¹⁸⁾。この日記の最後に記された神への讃美の言葉からは、試験結果に対するソランケの溢れるばかりの熱い歓喜の思いが伝わってくるかのである。後年、ソランケの妻は、筆者の質問に対して、夫ソランケの性格を「勤勉」⁽¹⁹⁾ (snoipms) という表現で実に簡潔に言い表してくれたが、おそらくフリータウン時代の若きソランケもまた、勉学に真摯に取り組む、実に勤勉な学生であったにちがいない。

しかし、フリータウン時代のソランケはまた、単にフラー・ベイの学生であったばかりか、中等教育を行う学校の教師としても働いていたのであった。

前述したとおり、一八世紀末に解放奴隷の入植地として建設されたフリータウンには、早くから欧米の宣教諸団体が入ってキリスト教の布教活動を行うようになり、その過程のなかで多くのミッション・スクールが開設されていた。例えば、一九一八年の時点で、フリータウン植民地には、CMS、ウェスレヤン・メソジスト、統一

メソジスト、ローマ・カトリック、モラヴィア兄弟団、セブンスデー・アドベントイスト等の宣教諸団体によって、初等・中等教育を行うミッション・スクールが九六校あまり開設されており、その在籍生徒総数は七四〇七名、うち実際に通学していた生徒数は平均で五一〇二名にも達していた。⁽²⁰⁾このように、当時のフリータウンには、少数エリートのためのフリーラー・ベイのような高等教育機関が存在する一方で、他の英領西アフリカ植民地と比較してもかなり裾野の広い初等・中等教育が行われていたのである。

ソランケは、フリーラー・ベイ在学中の一九一七年、フリータウン植民地にあるそうした諸学校のうち、レオポルド教育学院 (Leopold Educational Institute) という中等教育の学校の教師に任用されている。⁽²¹⁾同学院は、いわゆるミッション・スクールではなく、一八八四年にルイス・ジョン・レオポルド (Lewis John Leopold) という教育家が個人で創立し、その後も彼が校長を務めていた私塾的な学校であった。植民地政府の資料によれば、当時の同校のカリキュラムには、英語、歴史、英文学といった人文系諸科目に加えて、代数幾何や天文学などの自然科学系の科目が含まれていたが、⁽²²⁾ソランケが同校でどのような教科を実際に担当し、またいかなる教師生活を送っていたのかは必ずしも定かではない。

その後ソランケは同校を辞し、一九二〇年一〇月からはシエラレオネ政府教育局付きの教員となり、⁽²³⁾さらに二年八月からは、新設されて間もない官立模範学校中等科 (Government Model School, Secondary Classes) の補助教員として働いている。⁽²⁴⁾彼は、収入的にも安定し、また教育水準も高い官立模範学校の教師になれたことを心から喜んでいたのである。⁽²⁵⁾

のちにソランケは、イギリスに留学して苦学の末に法廷弁護士の資格を取得することになるが、結局彼は法律家の道を選ばず、アフリカ人学生組織である WASU の維持運営とその発展のために後半生を捧げた。おそらくそうした人生の選択には、ソランケが、青年期を通じてアフリカ人にとっての教育の重要性を深く認識し、また

自ら教師になることを志し、そして一時期とはいえフリータウンで実際に教師として働いていたという事実と経験が大きな影響を与えていたものと考えられる。

一九二一年三月、ソランケは念願の学士号を授与されている。そして、翌二二年七月には官立模範学校の教職を辞し、同年、法学を学ぶためにイギリス留学の途についた。

(三) ロンドン留学時代

一九二二年に渡英したソランケは、ロンドン大学ユニバーシティ・コレッジ (University College London) に入学し、その一方でオックスフォード大学の外部聴講生ともなり、ロンドンに生活の拠点を置きつつも、オックスフォードにもしばしば通い、法学関連の諸科目を学ぶ多忙な学生生活を送るようになった。このとき彼は、大学の学部生とはいえ、すでに三〇代半ばを迎えていた。

アフリカ人私費留学生であったソランケにとって、生活費の高いロンドンでの学生時代は、けっして学究のみに専心できるような安逸なものではなかった。彼の生活は貧しく、借金に追われることもしばしばであった。特に、一九二四から二五年にかけては、ナイジェリアからの仕送りが途絶えがちであったためか、彼の生活は金銭的にかなり逼迫していたようである。当時の彼の日記には、「ロンドンにおける私の苦難」(My Hardship in London) と題した次のような走り書きの箇所がみられる。そこからは、生活費の捻出に困窮するソランケの、どこか淡々として客観的ではあるが、しかしそれだけにかえって切なく悲痛な叫び声のようなものが聞こえてくる。

一、一九二四年の夏はすべて、日々の糧をうるために、UC（ユニバーシティ・コレッジ）でヨルバ語を教えねばならなかった。

二、あちらこちらから借金をした。

三、持っていた（金製の）装飾品を借金の代わりとして大家の婦人に渡した。

四、コレッジの学寮長からクリスマススの生活費として五ポンドを借りた。

五、食べ物が何もない。あるのは空っぽの部屋だけだ。⁽²⁷⁾

一九二四年五月、ソランケは、ロンドン大学東洋学学院でヨルバ語の非常勤講師として働くように勧められ、やがて生活費を得るために勉強のかたわら同大学でヨルバ語を教えるようになる。しかし、この日記の箇所から推察する限りでは、ヨルバ語を教えることによって得られた収入も、彼の生計を賄う上では決して十分なものではなかったようである。その後もソランケは、大学の教職員や友人から借金を重ね、ついには滞納していた家賃の代わりに愛用の蓄音機や金製品といった身の回りの品を手放すまでにいたっている。⁽²⁸⁾無論、こうした金銭的な困窮は、当時のアフリカ人留学生ならば多かれ少なかれ直面した問題ではあったろうが、それでも毎日の食事にさえ事欠くほどの貧困生活は、やはりソランケにとって深く骨身に染み込みに違いない。

しかし、ロンドン留学時代の青年ソランケは、このように貧しくはあったが、けっして私事のみで没していたわけではなかった。それどころか、むしろかえって金銭的な試練の渦中にあつた一九二四年から二五年にかけての時期にこそ、ソランケは社会への働きかけやアフリカ人学生の組織化といった活動を積極的に展開し、その若き指導者としての頭角を現わし始めるのである。

この時期のそうした活動の一つに、新聞や雑誌への投書がある。一九二四年頃から、ソランケはロンドンの新聞や雑誌にしばしば投書を寄せるようになり、そのなかでアフリカの諸問題を取り上げて持論を展開し、大いに

健筆を奮い始める。例えば、現在もイギリスで発行されている西アフリカ問題専門誌『ウェスト・アフリカ』(West Africa)には、一九二四年三月から二五年五月にかけて、そうしたソランケの投書が少なくとも五通ほど掲載されている。

例えば、一九二四年三月二二日号の『ウェスト・アフリカ』誌には、ナイジェリアで行われていた人肉を食する習慣が植民地政府の努力によって廃絶されたとする主旨の記事がロンドンの新聞『イーブニング・ニュース』(The Evening News)に掲載されたのを受けて、ソランケがそれに強く抗議する内容の投書がみられる。このなかでソランケは、ナイジェリアでは人肉を食したとする記録は全く存在しておらず、そうした人種的偏見と事実誤認に基づく記事がイギリス社会におけるナイジェリア人への差別意識を助長しかねない、と強い口調で抗議している。⁽³⁰⁾

また、一九二五年四月四日号の同誌には、英領西アフリカ国民会議(National Congress of British West Africa: NCBA)を批判する内容の彼の投書が掲載されている。NCBAは、二〇年にゴールドコーストの弁護士でありジャーナリストでもあったケイスリー・ヘイフォードのイニシアティブによって創設された、英領西アフリカ植民地を糾合するナショナルリスト組織であるが、その投書のなかでソランケは、「西アフリカ国民会議はプログラムを修正し、それをより建設的なものとすべきである。そのプログラムは、ただ政府にあれをしてくれ、これをしてくれと請願するだけの、あまりにも消極的なもののようにみえる。いまや我々は我々自身のために何らかの行動を起こさなければならない」と述べ、政府に対して政治的請願を繰り返すだけのNCBAの姿勢を批判し、アフリカ人の自助努力の必要性を強調している。⁽³¹⁾

こうした『ウェスト・アフリカ』誌に掲載された一連の投書进行分析すると、当時のソランケの主張が、およそ以下の五つの骨子にほぼ要約できることがわかる。すなわち、①イギリス社会の人種差別状況を改善すべきこと、

②アフリカ人が民族的誇りを回復すべきこと、③それらの目的達成のためには、他者に依存せず、アフリカ人の自助努力を重視すべきこと、④アフリカ人は統一し、特に教育を受けたアフリカ人エリートと伝統的首長が互いに協力すべきこと、そして、その結論として、⑤人種差別の改善とアフリカ人の民族的誇りの回復のために自助と協力を推進すべき分野は、政治ではなく、むしろ教育であること、の五点である。⁽³²⁾そして、ソランケは、そうした自らの主張を具体化した活動の一つとして、西アフリカ人青少年の教育振興を目的とした教育基金を西アフリカ人自らの寄付によって設立するよう提案している。⁽³³⁾数年後にソランケは、ロンドンにアフリカ人学生のためのホステル（クラブ・ハウスを兼ねた学生の宿泊施設）を設立するために、WASUを代表して単身で英領西アフリカ各地を訪問し、三年間にもわたって広範な募金活動を展開するのであるが、それは西アフリカ人の自助努力による青年の教育振興という、こうした彼の持論を身をもって実行した姿であったといえよう。

また、このような活発な言論活動を行う一方で、ソランケは、一九二四年に他のナイジェリア人学生らとともにナイジェリア進歩同盟 (Nigerian Progress Union) という学生組織を創設している。そして、ついに翌二五年八月には、後述するとおり、ソランケのイニシャティブによってWASUが創設されるに至るのである。

他方、学業面では、ソランケは、一九二六年に法廷弁護士資格を取得し、さらにユニバーシティ・コレッジ卒業後は同大学大学院に進学し、「ヨルバの法と慣習」を研究テーマとしつつ、アフリカの伝統的法体系の解明と理論化を試みる独自の研究分野で研鑽を重ね、のちに修士号を取得している。

さて、これまで本章では、ソランケの日記などをもとに彼の青年期までの軌跡を断片的に辿ってきたが、次章においては、そうした過程のなかで形成され、のちにWASU創設に通ずる彼の思想・行動の原型ともなった「自助」の精神について考察を試みたい。

三、アフリカ人としての「自助」の精神

ソランケのいう「自助」(self-help)とは、「アフリカ(人)をアフリカ人自身が救済する」という彼個人の信念、モットー、あるいは原理原則のことにほかならない。例えば、ロンドン時代の彼の日記には、「アフリカ人への助言。自助の精神をもち、乞食の人種であることをやめよ⁽³⁴⁾」といった走り書きの箇所がみられるし、前述した『ウェスト・アフリカ』誌の彼の投書のなかにも、「我々の責務は自助によって我々自身の救済を達成することにある⁽³⁵⁾」と記されている。このように、ロンドン時代のソランケは、アフリカ人にとつての「自助」の精神の必要性をしばしば強調するようになる。そして、青年ソランケのなかに萌芽したこの「自助」という信念こそ、のちに彼が西アフリカ人学生を糾合するWASUの創設を発意し、その発展のために後半生を捧げるにいたった重要な精神的支柱ともなっていたのである。

それでは、このアフリカ人としての「自助」の精神は、一体いかにして青年ソランケのなかに形成されていたのであろうか。

前章で詳述したソランケの生い立ちを振り返ってみると、彼は、アベオクタの白人宣教師のもとで養育されて以来、ヨルバランドのミッション・スクールやフリータウンのフーラー・ベイ・コレッジに学ぶなど、ほぼ常にキリスト教や西洋型の教育といった西洋文化に接しつつ幼少期から青年期を過ごしてきたことがわかる。そして、そうした環境のなかで人格を形成してきたソランケは、当時の他の英領西アフリカ出身のエリートと同様、西洋文化、特にイギリス文化への深い親和感や憧憬の念を少なからず有していたにちがいない。

しかし、ロンドンに留学し、前章で若干触れたようなイギリス社会の根深い人種的偏見や差別を経験するなかで、ソランケはアフリカ人としてのアイデンティティをより明確なものとしていくのである。

また、ソランケは、アフリカを離れて渡英したことによって世界をより広い視野で捉えることができるようになり、その結果、非西洋の、特にアジアの諸民族の台頭や抵抗運動の存在を知り、少なからず触発されるのである。そして、そこから彼は、同じ非西洋人であるアフリカ人の民族的な自立の可能性と必要性を認識していく。

例えば、一九二四年四月のソランケの日記には、彼が大英博物館を初めて見学に訪れたときの印象が次のように綴られている。この日記の箇所によると、ソランケは博物館内にあるアフリカやアジアなど世界諸地域の展示品を見学したのち、ある結論に達したという。すなわち、「私の結論とは、西洋文明には、言われているほどに目新しいものは何もないということ。そして、むしろインド人、中国人、日本人などすべての東洋人にこそ、東洋における西洋的要素を排し、東洋文明を維持するために、いまや政治的闘争を行うに足る正当な根拠があるということだ」と記している。そして、さらに彼は、「西アフリカ人は、そうした東洋の側と運命を共にしなければならぬ」と綴っている。⁽³⁶⁾

このように、人種差別の体験に加えて、非西洋世界に関する知見を深め、特にアジアの諸民族の台頭や抵抗運動に触発されることによって、ソランケは次第にアフリカ人としての民族的アイデンティティに目覚めていく。そして、こうした民族的な意識の覚醒もあって、やがてソランケは大学院においてヨルバ社会を対象としたアフリカの伝統的法体系と慣習に関する研究に自ら取り組むようになるのである。

ソランケは、アフリカ人がアフリカ社会を研究するという自らの研究姿勢とその意味について、以下のように語っている。「アフリカの慣習、法、制度は、すべての西アフリカ人によって遵守され、敬愛され、振興されなければならない。アフリカに関する文献はアフリカ人自身によって生み出される必要があるが、そうした文献のなかでも最も重要なものは、我々の慣習と制度に関する研究成果であろう。私自身、この分野にこれまで二年余り携わり、それが学術的進歩を、人種的にも、民族的にも、そして国際的にも促進する最も有効な手段の一つで

あることを見出した⁽³⁷⁾。

ソランケによれば、一五世紀以前のアフリカ社会は、その後の奴隷貿易によって、「約五〇〇年の歳月をかけて、ゆつくりと、システムティックに、そして徹底的に破壊された⁽³⁸⁾」のであり、その過程のなかで、それまでのアフリカの光彩陸離とした歴史は抹殺され、アフリカ大陸は西洋文明によって一方的に暗黒大陸の烙印を押されてしまったのである。そして、「もし、アフリカが世界に解き明かされるとするならば、それはアフリカの子孫の手によってのみ可能であるし、またそうあらねばならない⁽³⁹⁾」。このように語るソランケは、アフリカの過去をアフリカ人自らの手によって解明し、再発見し、再評価する学問的営為の必要性を深く認識していたのであり、それゆえに、自らもまたヨルバ社会の慣習法と制度の研究に専念したのである。

ここに、WASU創設に通ずるソランケの、アフリカ人としての「自助」の精神の原型が潜んでいる。すなわち、ソランケにとつての「自助」とは、アフリカ人が、他の文明や人種に依存せず、アフリカ独自の文明と文化に立脚し、自主独立の気概を有して、否定されたアフリカの歴史と破壊されたその社会を再建しようとする人種的決意であり、彼の人生を貫徹する、素朴ではあるが力強い精神的欲求であり、前述したとおり、それはなによりもまた、彼がアフリカ人のための学生同盟の創設を発意するにいたった精神的支柱なのであった⁽⁴⁰⁾。

四、結びに代えて——西アフリカ学生同盟の創設——

一九二五年八月七日、ロンドンのソランケの自宅に、ナイジェリア、ゴールドコースト、シエラレオネ、ガンビアの四つの英領西アフリカ植民地出身の留学生二一名が参集した。この日の会合は、当時イギリスを訪問中であった、シエラレオネ立法審議会議員でNCBWAの有力者でもあるバンコール・ブライト (H. G. Bankole-

Bright) の呼びかけに応じて開かれたものであった。

当時ロンドンには、ナイジェリア進歩同盟、アフリカ系人学生同盟 (Union of (for) Students of African Descent)、アフリカ進歩同盟 (African Progress Union)、ゴールドコースト学生協会 (Gold Coast Students' Association) という四つのアフリカ系人組織がすでに存在していたが、この会合の冒頭に発言したバンコール・プライトは、こうした既存のアフリカ系人諸組織の活動を一応評価しつつも、特に西アフリカ問題を討議し、西アフリカ人としての一体性の認識を涵養する学生同盟の創設が必要であると訴えた。そして、これに続いて、出席していた西アフリカ人学生による討議が行われ、その席上、正式にWASUの創設が決議されるにいたったのである。⁽¹¹⁾

かくして誕生をみたWASUは、その活動理念に自助・統一・協力の三原則を掲げ、また組織の活動目標として、アフリカの歴史や慣習などに関する情報センターとしての役割、文明の進歩に貢献するアフリカの実像の提示、アフリカ人としての民族意識と人種の誇りの振興といった諸項目を規約のなかに成文化している。⁽¹²⁾ こうしたWASUの理念と目標には、アフリカの救済と発展のためにアフリカ人の「自助」の精神の必要性を訴え、またアフリカ独自の歴史や文化を広く世界へと啓蒙しようとしたソランケの思想的影響が明確に読み取れるのである。⁽¹³⁾ なお、WASU創設以後のソランケの軌跡とWASUの諸活動に関しては、本稿においてではなく、論を改めて詳細に考察することとしたい。

〔付記〕 本稿は、文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

(1) 本稿を執筆するにあたって、筆者は、ロラ・エジウンミ (Lola Ejiwunmi)、オルボミ・オゲデングベ (Olu-

boni K. Ogedengbe) オペオル・オグンビイ (Opeolu Ogunbiyi) の三人の女性から、WASU 創設にいたるまでのソランケの人生の軌跡に関する貴重な証言を得ることができた。アフリカ人である彼女たちが日本語で公刊される本稿を読むことはおそらくないであろうが、ここに記して感謝の意を表しておきたい。

ロラ・エジウンミは、ソランケの姉コンフォート・アデオラ・エジウンミ (Comfort Adeola Ejiwumi) の孫娘で、ナイジェリアのラゴスに在住し、一九九五年当時は母 (トミ・エジウンミ Tomi Ejiwumi) が四五年に開いた産院を引き継いでその経営にあたっていた。筆者は、九五年九月五日、ロラ・エジウンミにインタビュする機会をえた。五二年生れの彼女は、従祖父 (おおおじ) にあたるソランケ (五八年ロンドンで逝去) と直接の面識はなく、ソランケの公的な活動についてもほとんど何も知らなかったが、ソランケの出生や親類関係など彼の私的な側面についていくつかの重要な情報を与えてくれた。また、ソランケの妻と子供たちの存在を筆者に語り、彼女たちに連絡を取るよう勧めてくれたのもロラ・エジウンミである。

オルボミ・オゲデングベは、ソランケが二人の妻との間にもうけた四人の子供のなかのただ一人の娘である。彼女は、ラゴス大学付属病院産婦人科の顧問医師の地位にあり、書簡による筆者の質問に対して丁寧な返信 (一九九六年一月一日付) を寄せてくれた。

オペオル・オグンビイは、ソランケの二人目の妻であり、前述したオルボミ・オゲデングベの実母にあたる。彼女は、WASU が所有していたホステルの寮母として夫ソランケとともに WASU の活動に深く関わっていた。彼女は、ソランケの死後はナイジェリア人の医師と再婚し、ロンドンに在住していた。筆者は、一九九六年三月二五日、ロンドンにある彼女の自宅を訪れ、当時八六歳であった彼女にインタビュし、ソランケと WASU に関する貴重な証言を得ることができた。

(2) 拙稿「西アフリカ学生同盟とラディボ・ソランケ」、小田英郎編著『アフリカ その政治と文化』所収、慶應通信、一九九三年、三五五—三五六頁。

(3) 例えば、Immanuel Geiss, *The Pan-African Movement*, translated by Ann Keep, London: Methuen, 1974, p. 297; A. Oyewole, *Historical Dictionary of Nigeria*, Metuchen N. J. and London: The Scarecrow Press, 1987, p. 308.

(4) Great Northern London Cemetery, *Register of Burials Consecrated Ground*, No. 37, no. 156155.

- (5) なお、ソランケ逝去を報じた当時の雑誌記事のなかに彼の生年を一八八〇年とする記述がみられるが、その根拠は明らかではない (*West Africa*, 13 September, 1958, p. 885)。
- (6) 伊谷純一郎ほか監修『アフリカを知る事典』、平凡社、一九八九年、四六頁。
- (7) 妻オベオル・オグンビイの証言 (一九九六年三月二五日)。
- (8) 妻オベオル・オグンビイの証言 (一九九六年三月二五日)、娘オルボミ・オゲデングベからの筆者宛て書簡 (一九九六年一月一日付)。
- (9) この点について、ソランケの娘オルボミ・オゲデングベは、筆者宛ての書簡 (一九九六年一月一日付) のなかで、「彼(ソランケ)の父は、農民であるとともに教会堂の管理人でもあった」と記している。もしこれが事実とすれば、教会堂を管理していたソランケの父が、以前から知っていた白人宣教師に自分の息子を預けた、という推論も十分に成り立つであろう。しかし、この場合、なぜイファの占師がキリスト教の教会堂の管理人をしていたのか、という素朴な疑問点が残る。
- (10) Michael Crowder, *The Story of Nigeria*, London and Boston: Faber and Faber, 1962, p. 84.
- (11) この時期のヨルバランドにおいて奴隷への需要が増大した原因としては、まず第一に、商業活動の拡大によって、ヨルバランド内の労働力需要が増加していたこと、第二に、イギリスの艦船による奴隷船の摘発が強化されるなかで、ギニア湾岸のなかでも監視の眼が行き届きにくい長い海岸線をもつヨルバランド南部やダホメーからの奴隷輸出への需要が高まっていたこと等が挙げられる (*Ibid.*, pp. 92-93)。
- (12) *Ibid.*, p. 94.
- (13) *Ibid.*, p. 114.
- (14) 同新聞の正式名称は *Iwe Irohin fun Awo Egba ati Yoruba* といひ、その発行者は CMS の白人宣教師ヘンリー・タウンセンド (Rev. Henry Townsend) であった。また、ヨルバ語版が刊行された年の翌年 (一八六〇年) には、英語版も創刊され、この (Dayo Duyile, *Makers of Nigerian Press: An Historical Analysis of Newspaper Development, the Pioneer Heroes, the Modern Press Barons and the New Publishers 1859-1987*, Nigeria: Gong Communications, 1987, pp. 14-24)。
- (15) 妻オベオル・オグンビイの証言 (一九九六年三月二五日)。

- (16) Sierra Leone Colonial Government, *Sierra Leone Blue Book 1917*, Freetown, 1918, p. U5.
- (17) ソランケの死後、彼が保管していた WASU 関連の資料や彼の日記、メモ、書簡等は、妻オベオルによってナイジェリアのラゴス大学に寄贈され、現在同大学付属ガンジール図書館に「ソランケ・コレクション」(Solanke Collection) として所蔵されている。以下、本稿の注記欄で用いる SOL という略称はこの「ソランケ・コレクション」のことを示している。なお、筆者は一九九五年八月九月にナイジェリアを訪問し、同コレクションの調査を行った。
- (18) Ladipo Solanke, *Diary 1918-July 1920*, SOL Box 34.
- (19) 妻オベオル・オクンボイの証言(一九九六年三月二十五日)。
- (20) Allister Macmillan (ed.), *The Red Book of West Africa*, London: Frank Cass, 1920 (Reprinted, Ibadan: Spectrum Books, 1993), p. 239.
- (21) *West Africa*, 13 September, 1958, p. 885; A. Oyebole, *Historical Dictionary of Nigeria*, p. 309.
- (22) Sierra Leone Colonial Government, *Sierra Leone Blue Book 1917*, Freetown, 1918, p. U3.
- (23) Ladipo Solanke, *Diary, Notes, Memo etc.* : Private and Confidential (1920), SOL Box 34.
- (24) Sierra Leone Colonial Government, *The Sierra Leone Royal Gazette*, 13 August, 1921, p. 726.
- (25) Ladipo Solanke, *Diary, Notes, Memo etc.* : Private and Confidential (1920), SOL Box 34. ソランケは、官立模範学校中等科での勤務を始めた日のことを次のように短く日記に書き記している。「一九二一年八月八日、官立模範学校のモーガン校長の下で勤務を始めた。ハレルヤ」。
- また、ソランケの日記からは、少なくとも一九二一年当時、彼が鉄道関係の子供たちの教師をしていたことがわかる。しかし、彼は、鉄道会社当局との間のなんらかの衝突のためにそこでの教師を辞職することになり、以後しばらくの間は彼の自宅で子供たちに無報酬で勉強を教えていたようである (Ibid.)。
- (26) Sierra Leone Colonial Government, *The Sierra Leone Royal Gazette*, 19 August, 1922, p. 681; Sierra Leone Colonial Government, *Report of the Education Department for the Years 1914-1922*, Freetown, 1923, p. 43.
- (27) Ladipo Solanke, *Diary, Notes, Memo etc.* : Private and Confidential (1920), SOL Box 34.
- (28) Ibid.

- (29) *The Evening News*, 5 March, 1924.
- (30) *West Africa*, 22 March, 1924, p. 247.
- (31) *Ibid.*, 4 April, 1925, p. 311.
- (32) *West Africa*, 22 March, 1924, p. 247; *ibid.*, 16 August, 1924, pp. 834-535; *ibid.*, 4 April, 1925, p. 311; *ibid.*, 25 April, 1925, p. 407; *ibid.*, 30 May, 1925, pp. 582-583.
- (33) *West Africa*, 4 April, 1925, p. 311; *ibid.*, 30 May, 1925, p. 583.
- (34) Ladipo Solanke, *Diary, Notes, Memo etc.* : Private and Confidential (1920), SOL Box 34.
- (35) *West Africa*, 4 April, 1925, p. 311.
- (36) Ladipo Solanke, *Diary, Notes, Memo etc.* : Private and Confidential (1920), SOL Box 34.
- (37) Ladipo Solanke, *United West Africa (or Africa) at the Bar of the Family of Nations*, London, 1927 (New Impression, London: African Publication Society, 1969, p. 63).
- (38) *Ibid.*, p. 40.
- (39) Ladipo Solanke, "Lifting the Veil," *WASU*, No. 1, March 1926, p. 14.
- (40) 拙稿「西アフリカ学生同盟とラディボ・ソランケ」三三七―三五八頁。なお「ソランケが「自助」を強調するようになった背景には「ユニバーシティ・コレッジの比較法学の教授であったド・モントモレンシー教授 (Prof. J. E. G. de Montmorency) の思想的影響が少なからずみられたと考えられる。同教授は「ソランケが主宰するナイジェリア進歩同盟の会合でしばしば講演を行い、特に一九二四年一二月には「自助」をテーマに講演している (*West Africa*, 27 December, 1924, p. 1494.)」。
- (41) *West Africa*, 15 August, 1925, p. 1002. 拙稿「西アフリカ学生同盟とラディボ・ソランケ」三五九―三六〇頁。
- (42) *WASU*, Vol. V, No. 1, May 1936, p. 11.
- (43) 拙稿「西アフリカ学生同盟とラディボ・ソランケ」三六〇頁。